

大著である。八百頁に迫る厚さだけではない。沖縄と北海道が近代日本に編入された明治初期から台湾・朝鮮の支配を経て大日本帝国の崩壊、そして戦後の沖縄復帰までの約一世紀、「日本」と「非日本」を分ける境界線がどう変動してきたのかを、境界線上の地域の統治をめぐる言説から詳細に跡づけている。

印象的なのは、これほど広範な言説を次々に取り上げながら、最後まで著者の視点にほとんどぶれがないことだ。著者は終始、沖縄と台湾、朝鮮を内地の延長とみなす同化主義と、ネーション外部の植民地と見る分離主義の対抗軸の中で諸論を位置づけている。

著者によれば、前者はもともとすべての国民に平等の権利を与える啓蒙思想を、後者は統治コストの節約という狙いと社会進化論的な差別思想を背景としていた。後者における伝統や「自治」の容認は、差別や排除と表裏をなしていたのである。ところが日本の同化論では、権利の平等への志向はわずかな論者にしか認識されず、むしろより上位の脅威たる「欧米」への対

## 同化と分離の間で

### 植民地政策を検証

抗手段という面が強く意識されていった。その結果、「日本人」への権利ぬきの改造が強制されていく。

こうして著者は、「欧米」の脅威という意識が日本の植民地政策をいかに方向づけていたかを検証する。脅威を感じていた統治者たちは、危機の度に自治よりも矛盾だらけの同化に傾いていったのだ。ここではたしかに、本書の長期的な視野がよく生かされている。

ただ、政策論を越えて思想や運動の言葉の分析になると、著者のぶれのなさが逆に気にもなってくる。それらの言葉が生きられるとき、そもそも同化／分離の境界線自体の起源はどう問い返されていたのか。最終章の議論を除き、本書は「日本人」の境界そのものの存在を問うよりも前提としているのではないか。読み終えて、そんな印象がどうしても残ってしまった。

ともあれ話題作となった前著から数年で、またもやこんな大作を書いてしまう著者のパワーには感服する。植民地政策学をめぐる屈折した展開なども興味深く、一読して得るところが大きい。（東大助教授）

## 〈日本人〉の境界



小熊 英二

（新曜社・778頁・5,800円）  
おぐま・えいじ 62  
年生まれ。慶応大学総  
合政策学部教員。著書  
に『単一民族神話の起  
源』。